

伊藤 正晃*

Masaaki ITO*



複言語主義への挑戦

～講義「世界の言語」の経験をゼミへの運用に～

The Challenge of Plurilingualism:

Applying the Experience of the Lecture 'Languages of the World' to Seminars

キーワード：複言語主義、言語ゲーム、アウト
プット

0. はじめに

本稿を「研究ノート」として投稿していいものかと悩んだ。筆者が所属する中部大学国際関係学部国際学科（以下、「国際学科」と称す）で担当している講義に「世界の言語」がある。内容は言語学入門に匹敵するが、その講義の準備をしている段階で気づいた言語学に関する疑問や課題に対し、筆者個人が進めてきた研究の蓄積がある。しかし、これらの研究分野は、筆者の専門分野に合致するものではなく、専門分野の周辺に位置するものばかりである。そのような理由から、研究論文としての投稿にせず、この知識を学生に還元すべく、講義やゼミの運営に活かしていきたいと考え、本稿を作成することにした。

国際学科が誕生したのは2016年度のことである。以前は3つの学科¹⁾が存在していたが、それぞれの分野の垣根を取り払い、1学科に統合してできた学科である。その翌年の2017年から、筆者はゼミを受け持つことになり、そのときからゼミの運営も考えなくてはならなくなった。筆者のゼミを選んできた学生のほとんどは言語学に興味がなく、運動部での経験や、音楽に関する卒業研究をしたいという学生が多い。そのような状況で、言語学や中国語学ばか

りを扱ったゼミの運営をすることができるわけもなく、少しでも学生の関心事と言語学を結びつけるような題材を探さなくてはならない。また、ゼミ生全員は大学院に進学せず、卒業後は就職を選択することもあり、研究の大変さだけを押しつけるよりも、就職先で役立てる知識をゼミ生には備えてほしいという考えから、PCスキルや表現力の向上に重点を置くことにしている。

さらに、本稿のテーマである「複言語主義」についても重要視している。「複言語主義 (Plurilingualism)」は「多言語主義 (Multilingualism)」と異なる。ある社会において複数の言語が共存することに着目した「多言語」ではなく、個人が多くの言語を運用することに着目した「複言語」に重点を置き、ゼミ生が多くの言語に触れ、生活のなかで少しでも話せるようになることを目指したい。

1. 講義「世界の言語」

本章では、担当している講義「世界の言語」で扱う内容を詳説する。

1.1. 世界言語の文字

「言語学入門」として何を扱うべきか。言語学と言っても、多くの研究分野にまたがっているため、講義担当者の専門分野によって、指導する内容や方法は十人十色と言えるだろう。「世

*中部大学国際関係学部国際学科

界の」と冠している講義である以上、世界を意識しなくてはならないと考え、筆者が扱うことのできる分野として「文字」を選択した。

世界のすべての言語の文字を取り扱うと、15回の講義では収まりきらず、文字だけを扱っただけで、言語学を履修させたことにはならないと考える。そこで、使用人口が多く、一般的に広く知られている言語の文字を扱うことにした。実際に扱った文字は以下のとおりである。

- a. キリル (ロシア) 文字 b. ギリシャ文字
- c. ハングル d. ビルマ文字
- e. タイ (シャム) 文字
- f. デーヴァナーガリー (インド系文字)
- g. アラビア文字 h. チベット文字
- i. グルジア文字 j. アルメニア文字

ここで扱う文字は、いわゆる「表音文字」である。漢字は「表語文字」であり、文字数が多すぎるため、講義では扱わないことにした。それぞれの文字を以下の方法で扱った。

- A. 文字体系の説明 (文字の配列、母音・子音の別と音価²⁾、大文字・小文字の別)
- B. 文字の表記方法 (書き順、文字の方向など)
- C. 日本語の五十音との対応 (自分の名前を表記する)
- D. 文字の解説 (料理名、あいさつ表現、数字など)

A. では、各言語の文字配列順を示し、それぞれの文字がもっている音価を示す。キリル (ロシア) 文字、ギリシャ文字、アルメニア文字は大文字・小文字の別があるため、C. では苗字と名前の頭文字は大文字に変換するよう指導する。

B. では、手書きの際に注意が必要なことを

指導する。例えば、デーヴァナーガリーでは文字と文字をつなぐ線 (シローレーカー³⁾) を単語ごとに最後に書くこと (図1)、タイ (シャム) 文字の場合はループから書き始める (図2)、アラビア文字は子音どうしを繋げて書く (図3)、といったルールがある。このルールをはじめから明かすのではなく、C. の名前を書くワークをおこなっている最中に説明をする。その結果、学生は書き方の違いに気づき、印象づけに役立っている。ただ、学生からは、「最初に言ってほしい」という意見が飛んでくことになる。

D. は講義内で扱うことができれば解説をするが、講義内で終わらない場合は、授業外の学習時間に充てさせるため、家での課題としている。文字を解説するためにはA. の理解が必要である。欠席した場合、ここ課題に取り組むことが難しくなってしまう点は改善の余地がある。

1.2. 外国語の曲に邦詞をつける

外国語をただ訳すだけでなく、意味を理解した上で、制限された文字数で作品を仕上げるワークをおこなっている。扱ったことのある楽曲は、2009年以降に発表された、台湾、韓国、中国大陆のものである。年度によって扱う楽曲数が異なるが、学生の反応を見ながら決めている。

この邦詞を完成させるにあたり、その言語をある程度理解しなくてはならないが、学生がその言語を学習しているか否かに関わらず、誰も

नमस्ते → नमस्ते

図1⁴⁾

શૃંગૃદૃ તૃવૃ

図2⁵⁾

شكرا
شكرا

図3⁶⁾

がワークに取り組めるよう、原文訳は予め用意をする。さらに、音楽の知識が必要になるため、楽譜の読み方など、楽典にかかるところは最初に説明をおこなっている。また、この前段階として、日本で歌われている比較的短い曲の楽譜を用意し、各自が世界観を設定して替え歌を入れ込む練習をおこなっている。これにより、スムーズ且つ諦めずに長い曲の邦詞が作成できるようになっている。

1.3. 身近に感じられる言語学

その他、「世界の言語」では、「オノマトペ」や「人称と役割語⁷⁾」、「方言圏論⁸⁾」、「比喩」などを取り上げている。学生が普段使っている「ことば」に目を向けさせるため、身近に感じられる疑問を投げかけ、先人がどのように研究をしてきたのか、そして、どのような論文があるのかを紹介し、それを読み解きながら、学生自身に気づきを与え、感じたことをレポートとして提出させている。また、必要に応じて、Google フォームを用いて回答させ、授業内でフィードバックする方法を取っている。この方法は、学生自身の回答が取り上げられたり、自分では気づけない回答があったりするなど、学生の積極性が見られ、一定の効果があると考えられる。

2. ゼミの構築にむけて

2017年度以降、言語に関することを中心に、ゼミの構築をはかってきたが、ゼミ生が卒業するたびに、「学生に何かを残せただろうか」という疑問が残っていた。本稿を作成するにあたり、ゼミ構築の再検討と改訂を決意し、講義「世界の言語」で得られた知識を活かしながら、筆者の指導できる分野を存分に発揮できる方法で再構築を検討することとした。

2.1. 三本柱の設定

筆者が提供できる分野として、「言語」と「音楽」の二つがある。言語に関しては専門分野である。音楽に関しては、筆者が高校時代から研鑽を積んだ器楽演奏をはじめ、それに必要な音楽に関する知識を有しており、この分野についても指導が可能である。実際に楽器を指導することはせず、音楽をどのように分析をするのか、音楽の歴史などを解説し、学生が興味を持っている音楽を取り上げて、研究のアプローチの方法を示している。

上述の2分野に加え、学生が地域に貢献できる人材になれるよう、ボランティアなどの活動も検討している。実際に、筆者は大学のCOC事業に関与し、技能を活かした活動をおこなっている。その経験を学生に還元できるような場を作ることを計画している。

以上、「言語」「音楽」「活動」の三本柱で、ゼミを構築していく予定である。

2.1.1. 言語

上述にもあるが、世界の多くの文字を研究してきた。常にかけていることだが、「やはり覚えることは容易ではない」ということである。学生も同様に感じていることは相違ない。しかし、少人数であるが、言語に関心を寄せている学生がおり、大学が提供していない言語を学習したいという学生の要望に応えるため、ドイツ語の非常勤の先生の協力を借りて、「外国語勉強会」を授業時間外に開設している。この勉強会は2017年度に入学した学生の提案から始まり、今までにロシア語、ラテン語、ベトナム語に取り組んできた。2023年度現在で2名の学生が参加しているが、両名とも2024年に卒業が決まっており、勉強会は一旦閉じることになりそうだ。

ゼミでは、ただ外国語を学習するのではなく、外国語を身近に感じ、楽しく学べるようにする

ため、各学生に興味のある言語を選択させ、各人が資料を作成し、ゼミの中で発表してもらうことを考えている。そのため、PowerPointなどのソフトを使いこなせることが必要となり、さらにはデザイン力を身につけさせることが必要である。言語分野では言語だけでなく、PC操作の能力向上と表現力向上を目指す。また、人に教えたり伝えたりする伝達力も習得したいと考えており、その方法として、資料作りだけでなく、「カードゲーム」を利用することを考えている。実際に、筆者は英語のアルファベットを大文字、小文字それぞれ一文字ずつカードにし、トランプゲームにある「七並べ」の要領で文字を並べていく遊びを実践してみた。英語のアルファベットは26文字あり、大文字と小文字の2種類で54枚のカードができあがる。これはトランプと同じ枚数となり、七並べのルールに寄せるためには、「G」と「T」を「7」の代わりになるように設定した。このゲームを体験した学生の反応として、「ずっと ABCDEFG と頭の中で繰り返して疲れた」「G から A に並べるときは難しい」といった意見があり、やはり数字を並べるよりは慣れていないことがあり困難を感じてはいたが、「もう1回やろう」ということばが出てくることもあり、楽しいと感じていることがわかった。これは、年齢に関係なく、英語を習い始めた人にも有用であると考えられる。

このゲームを基本に、さらには、いつでも出せる「ワイルドカード」を用意することで、ゲームを複雑に且つストラテジー要素を持たせるなど、ルール作りにも目を向けさせることを検討している。そして、ラテン文字だけでなく、ハングルやタイ文字などにも拡張されればと考えている。

2.1.2. 音楽

前述にもあるように、実際に楽器が演奏でき

るようにすることが目的ではなく、音楽を研究の対象にできるよう、音楽への向き合い方を指導する。例えば、「この年代はこういった単語が歌詞に多く用いられている」「このグループの楽曲はこの表現が多い」「悲しい曲はほんとうに悲しいのか」「悲しい曲を聴きたくなるのはなぜか」「音楽で人の心を動かすことができるのか」など、音楽に付随する要素を理解させることを目的とする。

この要素を理解させるために、ゼミでは「作曲学」「コード学」を取り入れる。曲がどのように作られているのかを理解するためには、音の流れと和声のハーモニーを理解する必要がある、筆者が積み上げてきた経験を伝えていくつもりである。実際に、今までのゼミでは「カノン進行⁹⁾」といわれるコード進行を理解させ、実際に音符を当てはめる作業をさせている。授業の音楽が嫌いだった学生も、難しいと言いながら楽譜を書いて、一つの作品を作り上げている。ルールに則れば曲ができることを実感させるとともに、苦手意識を少しでも軽減させることができていると考える。

2.1.3. 活動

学生からの情報によると、同学科の他の指導教授は学外に出向き、ゼミ合宿やゼミ旅行、見学や参観をおこなっているという。筆者はフィールドワークをおこなうような研究分野ではないため、この活動には積極的ではなかった。それに加え、面倒くさがりのゼミ生が多く、何か提案が挙がっても、「時間がない」「金がない」という消極的な態度が目立つ。

しかし、筆者は大学院生のころから、老人ホームや幼稚園・保育園などに慰問演奏をおこなっている。また、音楽活動もしており、路上ライブやライブハウスでの演奏、さらにはスタジオ録音、CD製作などにも携わり、活動が苦手というわけではない。興味のない人を強制的に参

加させるという状態を良く思っていないだけである。では、ゼミで活動に着手するときに、どのような方法で取り組みればよいのだろうか。

筆者は、同大学内でおこなわれている「COC事業¹⁰⁾」の一環に「地域創成メディエーター」があり、地域で貢献できる学生の育成の事業にかかわっている。筆者の春日井出身であることも相まって、春日井市内でのボランティア活動を経験させたいと考えている。上記の取り組みの方法として、まず、筆者がおこなっているボランティアを見学させ、課題点や新規提案を考えてもらい、実際に学生が参加するといったかたちで、自分ができることをアウトプットする楽しさを実感してもらおうと考えている。筆者はオカリナグループを組んでおり、そのグループと共同でボランティア活動をおこなうことを計画しているが、音楽に限らず、手遊び、ストレッチ、ゲーム大会など、大学生としてできることをゼミ生に考えさせ、ボランティア先の老若男女に合わせた提案を構築させるつもりである。2024年度よりゼミに配属される学生には、熱心にスポーツや音楽に取り組んでいる者もあり、今まで以上に幅のある活動ができると確信している。頻度については学生の負担を考慮して検討していきたい。

2.2. ゼミの運営方法

上述の三本柱に代表者を立てて、ゼミの各回でのお題を出してもらう計画をしている。柱の代表者は半年ごとに見直しをかけて、ゼミの雰囲気や最大限に高められるようにする。2024年度は各柱に4名の代表者を配置し、「音楽」「言語」「活動」に関するお題を出し、そのお題に対して数回の演習で成果を出していく。その成果をアウトプットすべく、ポスターなどにまとめあげ、大学内でおこなわれるオープンキャンパス、大学祭などの展示物に仕上げ、広く発信することを考えている。ただ、資料を作成して

終了ではなく、その資料に対して学生がきちんと誰かに説明ができるようになり、その経験を通して、社会人としての素養を身につけてもらいたいと考えている。この経験によって、自分がどういったことに興味があり、どういった将来を描いているのかを気づかせ、就職活動や卒業研究がスムーズにとりかかれることを期待している。

筆者として準備しているものとしては以下のようなものがある。実現できるかは度外視し、それに準ずるものを出していきたい。

「音楽」については、作曲学、コード学の指導後に、実際に曲作りをおこなうため、ゼミ生で演奏ができれば、それを採録し、学科内あるいは学内で公表する場を設けて、アウトプットをおこなう。実際におこなえるかどうかは、ゼミ生には楽器経験者がおり、期待度は高い。

「言語」については、ゼミ生の興味ある言語をゼミ内で学習し、ゼロからどのように学習し、どのように覚えていったのかを示す。その際、その言語の全貌が理解できているかは問わず、資料を作成する時点で修得したものをわかりやすくアウトプットし、受信者に興味を持ってもらえるようする。この方法として、筆者が予めいくつかの言語を調査し、導入資料としてゼミ生に配布する。そして、各ゼミ生が興味のある言語を選択し、「数字」「疑問詞」「代名詞」などのテーマに従って資料を作成させ、ゼミで発表させ、受信者は発表の内容に評価をおこなってもらう形式を取る計画をしている。この点は本稿のテーマである「複言語主義」の達成に活かされ则认为る。

さらに、「言語ゲーム」をゼミで作成することを計画している。カードゲーム、ボードゲームなど、電子機器を使わないゲームを開発し、生徒向けのボランティアの際に使用していかうと考えている。筆者が先行で作成した、英語アルファベットのカードをきっかけに、ハングル、

キリル文字などの文字カードを作成し、多くの言語に触れられる場づくりを考えている。(図4-6)

「活動」については、「音楽」と関連性があり、音楽などのアウトプットをボランティアという形でおこなう計画である。また、その他の活動として、博物館などの参観なども考えており、ゼミを通してゼミ生の興味の持ったものを汲み取り進める。先述にもあるように、強制的ではなく、学生が自主的に進めたものをサポートするスタイルで携わる。

図 4 語族と言語

17	インド・ヨーロッパ語族									
	英語	ドイツ語	オランダ語	デンマーク語	ノルウェー語	スウェーデン語	アイスランド語	ガエリック語	フランス語	イタリアン語
日本語	English	Deutsch	Nederlands	dansk	norsk	svenska	islenska	Gaelige	français	italiano
いち	one	eins	een	ét	en	en	einn	aon	un	uno
に	two	zwei	twee	to	to	två	tvær	dhá	deux	due
さん	three	drei	drie	tre	tre	tre	þrít	trí	trois	tre
son										

12	インド・ヨーロッパ語族									
	ポーランド語	スロバキア語	クロアチア語	スロベニア語	ボスニア語	セルビア語	ブルガリア語	ロシア語	ウクライナ語	アルバニア語
日本語	polaki	česlina	hrvatski	slovenščina	bosanski jezik	srpski jezik	български	русский язык	українська мова	shqipërisht
いち	jeden	jeden	jedan	ena	jedan	jedan	един	один	один	një
に	dva	dva	dva	dva	dva	dva	два	два	два	dy
さん	trzy	tri	tri	tri	tri	tri	три	три	три	tre
son										

14	インド・ヨーロッパ語族									
	ペルシア語	バスター語	トルコ語	クルド語	アラビア語	ヘブライ語	チベット語	モンゴル語	ネパール語	スワヒリ語
日本語	فارسی	پښتو	Türkçe	کوردی	العربية	עברית	འབྲུག་སྐད་	chi Tonga	kiSewehili	isiXhosa
いち	yek	ye	yağ	yağ	واحد	אחד	འག་	tahta	moja	kunye
に	do	du	du	du	اثنان	اثنان	འདྲུག་	ua	mbili	kubili
さん	se	sey	se	se	ثلاثة	ثلاثة	འདྲུག་	tolu	tatu	kunhathu
son										

12	インド・ヨーロッパ語族									
	ヒンディー語	ネパळ語	マラーティー語	マラーティー語	マラーティー語	マラーティー語	マラーティー語	マラーティー語	マラーティー語	マラーティー語
日本語	हिंदी	नेपाली	मराठी	मराठी	मराठी	मराठी	मराठी	मराठी	मराठी	मराठी
いち	एक	एक	एक	एक	एक	एक	एक	एक	एक	एक
に	दो	दो	दो	दो	दो	दो	दो	दो	दो	दो
さん	तीन	तीन	तीन	तीन	तीन	तीन	तीन	तीन	तीन	तीन
son										

図4 語族と言語 (続き)

14	インド・ヨーロッパ語族				アフリカ・アジア語族				ニジェール・コンゴ語族				南オーストロネシア語族	
	インド・ヨーロッパ語族	インド・ヨーロッパ語族	インド・ヨーロッパ語族	インド・ヨーロッパ語族	アフリカ・アジア語族	アフリカ・アジア語族	アフリカ・アジア語族	アフリカ・アジア語族	ニジェール・コンゴ語族	ニジェール・コンゴ語族	ニジェール・コンゴ語族	ニジェール・コンゴ語族	南オーストロネシア語族	南オーストロネシア語族
日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
いち	ich	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک	یک
に	ni	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو	دو
さん	san	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه	سه

15	ドラヴィダ語族				ウラル語族				フィン・ウゴル語族				チュルク語族				モンゴル語族			
	ドラヴィダ語族	ドラヴィダ語族	ドラヴィダ語族	ドラヴィダ語族	ウラル語族	ウラル語族	ウラル語族	ウラル語族	フィン・ウゴル語族	フィン・ウゴル語族	フィン・ウゴル語族	フィン・ウゴル語族	チュルク語族	チュルク語族	チュルク語族	チュルク語族	モンゴル語族	モンゴル語族	モンゴル語族	モンゴル語族
日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
いち	ich	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று	ஒன்று
に	ni	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு	இரண்டு
さん	san	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று	மூன்று

15	タイ・カンダイ語族				オーストロネシア語族				シナ・チベットの語族				朝鮮語族			
	タイ・カンダイ語族	タイ・カンダイ語族	タイ・カンダイ語族	タイ・カンダイ語族	オーストロネシア語族	オーストロネシア語族	オーストロネシア語族	オーストロネシア語族	シナ・チベットの語族	シナ・チベットの語族	シナ・チベットの語族	シナ・チベットの語族	朝鮮語族	朝鮮語族	朝鮮語族	朝鮮語族
日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
いち	ich	한	한	한	한	한	한	한	한	한	한	한	한	한	한	한
に	ni	두	두	두	두	두	두	두	두	두	두	두	두	두	두	두
さん	san	세	세	세	세	세	세	세	세	세	세	세	세	세	세	세

図5 各言語のアルファベット

[illegible][illegible]

ロシア語のアルファベット アルファベット									
Аа	Бб	Вв	Гг	Дд	Ее	Ёё	Жж	Зз	Ии
[a] アー	[b] ベー	[v] ヴー	[g] ガー	[d] テー	[je] イェー	[jo] ヨー	[z] ジェー	[z] ゼー	[i] イー
Бб	Вв	Гг	Дд	Ее	Ёё	Жж	Зз	Ии	Йй
[b] ベー	[v] ヴー	[g] ガー	[d] テー	[je] イェー	[jo] ヨー	[z] ジェー	[z] ゼー	[i] イー	イランゴ [j] ヨー
Кк	Лл	Мм	Нн	Оо	Пп	Рр	Сс	Тт	Уу
[k] クル	[l] ル	[m] エン	[n] ナ	[o] オ	[p] プ	[r] ラー	[s] ス	[t] テー	[u] ユー
Фф	Хх	Цц	Чч	Шш	Щщ	Ъъ	Ыы	Ьь	Ээ
[f] フ	[x] ハー	[ts] ツー	[tʃ] チヤー	[ʃ] シヤー	硬音シヤ [ʃʲ] ツー	トウヨール・ドゥイ [ʲ] シヤー	[ɨ] ウイ	エー	[ɛ] ユー
Юю	Яя								
[ju] ヨー	[ja] ヤー								

[illegible]

図6 言語カードの原稿（線で分割しカードにする）

ㄅ	ㄆ	ㄇ	ㄏ	A	B	Γ	Δ
ㄏ	ㄏ	口	ㄏ	E	Z	H	Θ
𠂇	人	从	〇	I	K	Λ	M
ス	双	え	ㄣ	N	E	O	Π

ا	ب	ة	ت	अ	आ	इ	ई
ث	ج	ح	خ	उ	ऊ	ऋ	ॠ
د	ذ	ر	ز	लृ	लृ	ए	ऐ
س	ش	ں	غ	ओ	औ	ऐ	ँ

3. おわりに

筆者がゼミを担当したのは2017年度の入学生からであり、2023年度時点で4期の卒業生を送り出すことになる。この期間は、特に分野を設定せず、ゼミ生を迎えたため、筆者の得意とする分野に導くことはせず、学生の主体性を重んじておこなってきた。しかし、多くの学生は4年生になってもやりたいことが見つからず、就職活動に苦戦したり、卒業研究のテーマ決めにも困難したり、はたして卒業できるのか、また、社会人として通用するのか、その点が気かりだった。そのような状況でも、学生はそれなりのテーマを決め、留年することなく大学を巣立ってくれた。

コロナ禍に巻き込まれた年代ということもあり、就職活動で問われるであろう「大学で力を入れてきたこと」「ゼミでやってきたこと」などが回答できないという声が多く聞かれた。コロナ禍に関する規制が緩和され、コロナ禍前の生活スタイルにもどりつつある中、やはりこのままのゼミ運営では学生に思い出に残るキャンパスライフを送らせていないと感じ、本稿の作成を手がけるに至ったわけである。

本稿で挙げた計画の一部は、既におこなっているものもあるが、体系的におこなってはならず、教育研究として発表することもできなかった。本稿の計画を実現すべく、2024年度より、ゼミ生と密に連携し、誰一人欠けることなく実践していくと決意を固くしたところである。

本稿の実践については、1セメスター（半年間）で実施方法ならびに結果、学生の講評などが確定するため、次期『貿易風』にて報告をしたいと考えている。そのための準備段階として、本稿を研究ノートとしてまとめた次第である。

【注】

- 1) 国際関係学科、国際文化学科、中国語中国関係学科
- 2) 音価はIPA（国際音標文字）を使用した。IPAについては、2年次に開講される講義「音声学」で取り扱っている。
- 3) शिरोरेखा (śirorekṣā) : 「シロー」は「頭」、「レーカー」は「線」を意味する。
- 4) 図1は「ナマステ」と読み、「ありがとう」を意味する。
- 5) 図2は左右ともに「サワッディー」と読み、「こんにちは」を意味する。左はループをもつフォント (ตัวหนังสือมีหัว : トウア・ナンスー・ミー・ファ)、右はループをもたないフォント (ตัวหนังสือไม่มีหัว : トウア・ナンスー・マイ・ミー・ファ) である。「トウア・ナンスー」は「文字」、「マイ」は否定、「ミー」は「持つ/有る」、「ファ」は「頭」の意味。
- 6) 図3は「シュ克蘭」と読み、「ありがとう」を意味する。上段が正式な書き方で、下段は繋がられた文字を分離したものである。なお、アラビア語は右から左に読むため、下段は「ʾ(a) / r / k / sh」と文字が並んでいるが、「sh → k → r → ʾ(a)」の順に読む。母音は子音の上下に記号が打たれるが、通常は表記しない。「クルーアン（通称コーラン）」では見てわかるように母音の記号がついている。
- 7) 「役割語」は金水敏が命名したもの。話者の特定の人物像を想起できる言葉遣いのことを指す。(拙者、あちき、吾輩、おら、など)
- 8) 「方言周圏論」は柳田國男が『蝸牛考』で提唱・命名したもの。方言分布の解釈に関する原則仮説の一つである。
- 9) ヨハン・パッヘルベル (Johann Pachelbel; 1653-1706) が作曲した「カノン (Canon)」に見られるコード進行のこと。実際のコード進行は「I → V → VII^{bm} → III^m → IV → I → IV → V」となる。
- 10) Center of Community の頭文字を取ったもので、文部科学省から平成25年度「地（知）の拠点整備事業」に選定された取組の継続事業で、「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」を指す。

【参考文献】

《書籍》

- 細川英雄・西山教行編、『複言語・複文化主義とは何か ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』, 2010年, くろしお出版
- 三木井圭著、『タイ文字の謎 タイの歴史とタイ文字のルーツを探る7つの謎』, 2020年, NextPublishing Authors Press

- 加賀美常美代編著、『多文化共生論 多様性理解のためのヒントとレッスン』, 2013年, 明石書店
- 山梨正明・有馬道子編著、『現代言語学の潮流』, 2003年, 勁草書房
- ダニエル・L・エヴェレット著, 松浦俊輔訳, 『言語の起源 人類の最も偉大な発見』, 2020年, 白揚社
- 松本克己著, 『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』, 2006年, 三省堂
- 真田信治ら編, 『新版 社会言語学図集』, 2021年, ひつじ書房
- 岩田祐子ら著, 『社会言語学 基本からディスコース分析まで』, 2022年, ひつじ書房

《Web》

- Satoru Kimura, 「タイ文字のループレス系書体の変遷 - ATypl 19 Tokyo から」, 「no+e」, https://note.com/sa_to_ru/n/n483035db5905, (参照2024年2月28日)
- ごとうまさとし, 「タイ語フォント 無料・有料ダウンロードとおすすめフォント」, 「OFFICE MASA TO SHIGOTO」, <https://masatoshigoto.asia/lets-thai-font>, (参照2024年2月28日)
- Wiktionary, <https://en.wiktionary.org/>, (参照2024年2月28日)
- 「地域創成メディエーター」, 「中部大学」, <https://www.chubu.ac.jp/community-extension/human-resources/mediator/>, (参照2024年2月28日)
- 「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」, 「中部大学」, <https://www3.chubu.ac.jp/coc/>, (参照2024年2月28日)